

丈助の忠義

やまとの翁

むかしく、一人の殿様が
 ありました。ある時ひどい御
 病氣にかゝりまして、も一所
 詮命が助からぬと思いまし
 たから、丈助とゆ一忠義な家
 來を枕元に、よんで言置きを
 致しました。

「あ、余も今度わ、も一助、

からぬ。これからわ　どーかお前が余に代つて　若
 の身の上を氣を付けやつて下され。それから　余が
 死んだら、若を連れて御殿中の室から庫から　残ら
 ず見せてやつてくれ、然しあの廊下の向側の室だけ
 わ　見せてわならぬ。其譯わ、あの室の中にわ　黄
 金國の王女の繪姿が　かゝっているのて　夫を若に
 見せると　いけないのだ。これわくれくも　お前
 に頼んで置く。」

夫から殿様わ　間もなく逝去りました。夫で丈助
 わ遺言どーり若殿様を連れて　御殿の室から庫から

残らず案内しましたが、長い廊下の向側に行きましてから其室だけわ見せないのです。

若殿様わ 不思議に思し召されて「これ丈助 他

わもー残らず見せて呉れたのに、この室だけなせ

見せてくれないのだ』と尋ねました。夫で丈助わ

大殿様のご遺言を話しました所が、若殿様わどし

てもご承知しない。「見せてくれねば、いつまでも私

わこゝを動かぬ』と申されて、どしにも致し方がこ

ざいませんから丈助も 決心致しまして「あ、是程

までにお話してもお聞き入れがなければ、是非もな

い ご覽らんに入いれた上うへで 何か事ことでも起おこれば 六 六
 辨べんもあるたる」と考かんえましたから と一いく 其そのお
 室むろの障かきを明あけてご覽らんに入いれることにしました。

すると、其その中なかには、まことに奇麗きれいとも何なんとも言いえ

ない立派りつぱなお姫様ひめさまの繪姿えいさが 懸かつて居いました。若殿わかご

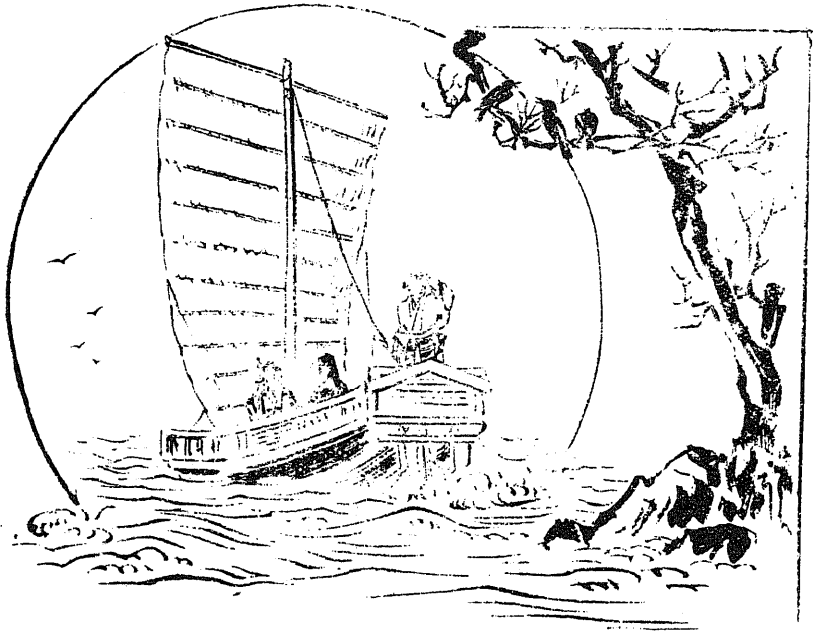
様さまわ一目見ひとみた許よかりで 「あつ」と仰おつつた切り御言おご葉はも

出でませなんだが 暫しばらくしてこのお姫様ひめさまわ 黄金國おうごんこく

の王様わさまの女むすめだとゆーことを丈助ぢやうすけから聞ききました。

そこで 何なんでもこんな立派りつぱな御姫様おひめさまなら どーか

して 自じ分ぶんのご殿ごんえ お迎むかえ申ましたいとゆーので



早速 お船をしたて、丈
助と二人で お迎に参り
ました。

で、都合よく お姫様
をお迎えになつて 若殿
様わ大喜びで もとのお
船に乗つてお歸りになり
ます。

丈助もやつと安心しま
して一人上の方え來て

そこいら見ていますと 向の方に 烏が三羽木の枝
 に留って しきりに何か咄しをして居ます。「はてな
 何を言ってるのか知らん」と思つて聞いて居ますと
 一羽の烏のゆゑにわ、

「かーく、 殿様がねー 今度お姫様をお迎になつ

たが お可愛相にお二人が一所に居ることが出来
 ないのよ」そーしますと二番目の烏が「かーくど

しして」と聞きます。すると前のが「かーくそ

れわねー 今お船が岸えお附きになると どこから

か立派なお馬が出て来る、 殿様がきつと 夫にお乗

りになる　そーすると　其お馬わ　すぐ風の様に
 空え　かけつて行つて　夫つ切り殿様わ　お歸りに
 ならないのよ」

これを聞いて丈助わ　ぎよつと仕ました。けれど
 も騒がないで　ヂット聽いて居ました。すると又
 二番目の鳥が　「かーく　可愛相だねー　助かる工
 夫がないのか知らん」　そこで前の鳥が言にわ　「かー
 かー　あるともく　夫わねー　其お馬がでて來た
 時　誰かすぐ鐵砲で打ち殺して仕舞えばいいのよ、
 併し其事をいつた人わ　足の指尖から腹の中央まで

石になつて行くのだから」

丈助わこれ聞いてやつと安心しました。所が又

鳥の話が始まつて、三番目の鳥が言にわ、「かーく

夫でも矢張だめよ。とゆーのわご殿えお歸つてか

らご婚禮の場でお姫様が病氣が起つて青くなつ

て死んで仕舞うのだよ」

これにわ丈助も驚きました。一つ逃れて又一つと

わこれのことばてどししたものと胸を痛めなが

ら尙黙つて聽いています。すると其鳥が「けれどそ

の時誰か一人殿様に知らさないでお姫様をそーっ

と抱いて来て お姫様の胸から血を三滴だけ吸い取れば助かる。けれど 夫を言った人わ 腹の中央から 頭の頂まで石になって仕舞うのよ」そこで三羽の鳥が一度にかゝくくくと鳴いて 大空はるか に飛んで行きました。

「さうとんだことになって来たわい 殿様をお助けもしてお二方をご一所にするにわ 是非とも我身を石にして仕まわねばならぬ。あゝしかたがないわ 何も忠義のためだ。これわ一つ自分の身を石にして 主人をお助けもさうさんければならぬ」

健氣にも丈助わ　　こーと決心して　岸につくの
 待つて居ました。

殿様とお姫様とわ　夢にもこんなことがあると
 わ存じません　お二人面白く船の中でお談して居
 られる中　船わだんく　進んでとうく　岸えつきま
 した。

丈助わ鳥の話したことが　今にやつて來ると思つ
 ていますから　中々油断しません。筒に丸こめた
 一撃と手ぐすね引いて待つて居ます。

やがて殿様がお姫さまの手を引いて　お二人で御

一所に船から岸えお下りになると、これわ不思議！
 どこからとなく、忽一匹の立派な逞しい馬が、すの
 くと岸え立顯れました。で、殿様わこれをご覽にな
 って、「や、これわ立派な馬だ、一つこれに乗って
 城え歸ろ」と仰せられてやがて其馬にお乗りにな
 るるとゆゝ時、忠義な丈助わ一生懸命、こゝぞと筒
 とり直して、「づどん」と一發、馬わ忽そこに斃れま
 した。

殿様わ譯をご存じないから、「丈助、お前わ何を
 するのだ」とお咎になりましたが、不斷からの忠義



をよくご存じだから
だ 夫丈で別にお叱りもな
さいません 丈助も亦其
譯わ 申し上げない。
さて間もなく御殿え
お歸り遊されて さーこ
れから 御婚禮だとゆー
ので御殿中わ 大騒です。
で、其晩になりますと
お二人わご立派に御装束

をなすつて正面しやうめんの間まにおつきになる。お客様きやくさまわす
 ーつと下したに并ならんで居まりまして、皆みなお目め出でたいくくと
 お祝いわいを申まして居まります中に、丈助ぢやうすけ一人ひとりわ 烏からすの咄はなしが
 ありますから、それどころでわありません心配しんぱいで心
 配ほいで堪たりませんから、始終しじゆう氣きを配くわつて居います。

(つゞきます)

